3 「明治大学平和教育登戸研究所資料館」設立へ

「完全正常化」を果たしたのち，2004（平成 16）年，新たに就任した納谷廣美学長によって明治大学における平和教育の柱として，登戸研究所遺構の保存と展示活用が打ち出され，４年間凍結されていた保存と活用問題が動き出しました。2005 年春，大学は和田一夫（元登戸研究所所員，登研会事務局長），長年登戸研究所研究に第一線でかかわってきた渡辺賢二，海野福寿，森恒夫と登戸研究所遺構の保存と活用についての話し合いの場を設けます。

その中で登研会を代表して和田より以下の訴えが出されます。

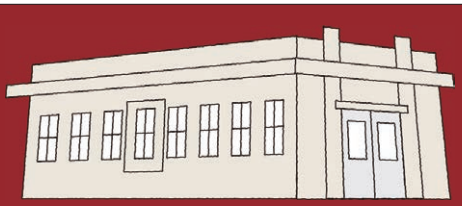
「登研会より保存要求の嘆願書を預かっているが，登研会会長の山田愿蔵（げんぞう）さんはもう 90 歳であるし，会員も歳をとり残り少なくなっているので，早く処置をしないと貴重な資料が散逸してしまうと危惧している」
（明治大学所蔵「懇親会メモ」より）

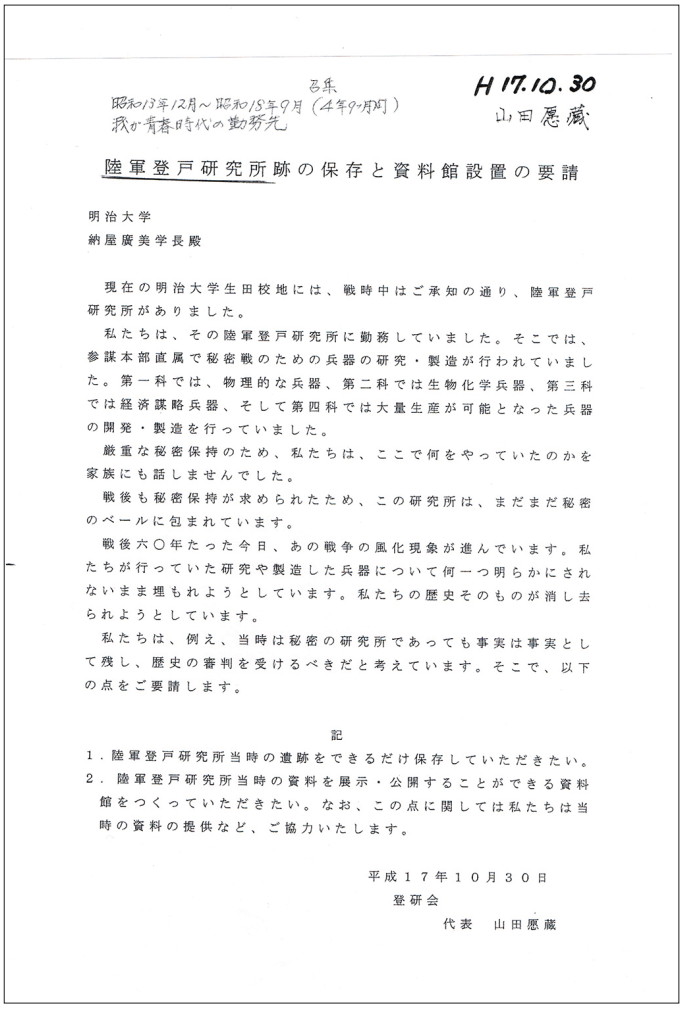
この話し合いの内容は，同年 10 月に開催された登研会でも共有されました。その中で，登戸研究所で行われた非人道的な研究や実験を繰り返してはいけない，後世の人たちには自分たちと同じ思いをして欲しくないという元勤務員たちの強い訴えが再度確認され，納谷学長宛に「旧陸軍登戸研究所建物等保存について（お願い）」を提出しました。

これを受けた大学は，2006 年 7 月に「登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）の設置に関する検討委員会要綱」を制定，同年 9 月に第一回検討委員会が開催され，具体的に登戸研究所遺構の保存と展示施設設立に動き出しました。

また，中原平和教育学級から継続して，川崎市では何度も登戸研究所に関する学習会が行われ，市民の登戸研究所掘り起こし運動が市域に広がっていきます。そうした中で，受講生らによって 2006 年に「旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会」が結成され，５号棟の移築保存と資料館設立に対し川崎市も明治大学を援助するよう市に求める保存運動を行います。

こうして多くの人々の思いを受け，2010 年 3 月 29 日に明治大学平和教育登戸研究所資料館は開館しました。





H 17.10.30
山田愿蔵

昭和13年12月～昭和18年9月（4年9ヵ月）
我が青春時代の勤務先

陸軍登戸研究所跡の保存と資料館設置の要請

明治大学
納屋廣美学長殿

現在の明治大学生田校地には、戦時中はご承知の通り、陸軍登戸研究所がありました。

私たちは、その陸軍登戸研究所に勤務していました。そこでは、参謀本部直属で秘密戦のための兵器の研究・製造が行われていました。第一科では、物理的な兵器、第二科では生物化学兵器、第三科では経済謀略兵器、そして第四科では大量生産が可能となった兵器の開発・製造を行っていました。

厳重な秘密保持のため、私たちは、ここで何をやっていたのかを家族にも話しませんでした。

戦後も秘密保持が求められたため、この研究所は、まだまだ秘密のベールに包まれています。

戦後六〇年たった今日、あの戦争の風化現象が進んでいます。私たちが行っていた研究や製造した兵器について何一つ明らかにされないまま埋もれようとしています。私たちの歴史そのものが消し去られようとしています。

私たちは、例え、当時は秘密の研究所であっても事実は事実として残し、歴史の審判を受けるべきだと考えています。そこで、以下の点をご要請します。

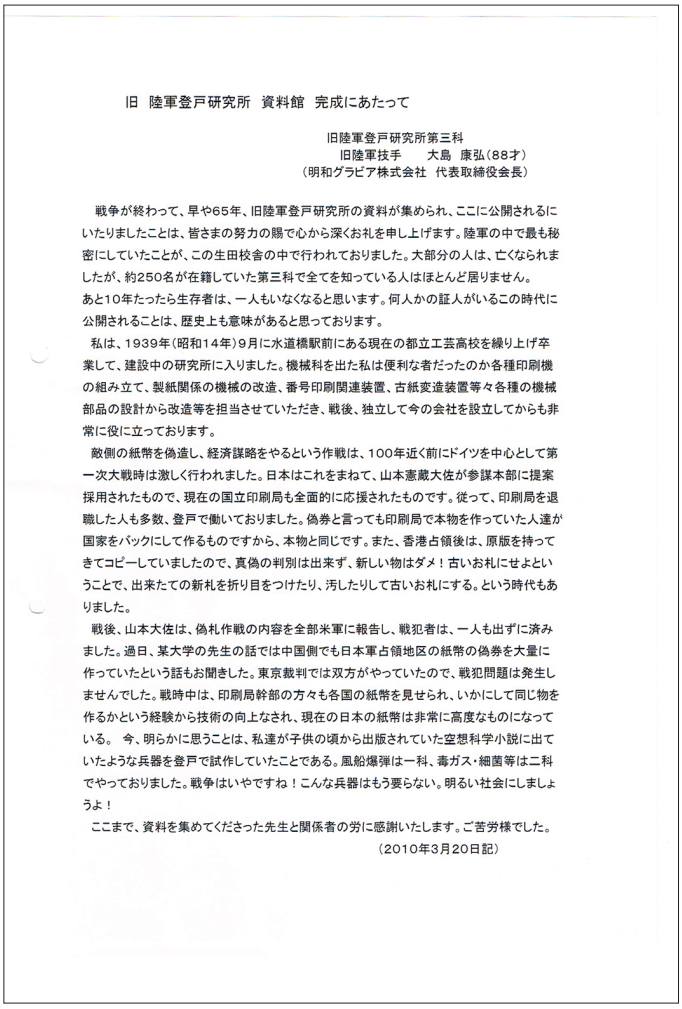
記

1．陸軍登戸研究所当時の遺跡をできるだけ保存していただきたい。
2．陸軍登戸研究所当時の資料を展示・公開することができる資料館をつくっていただきたい。なお、この点に関しては私たちは当時の資料の提供など、ご協力いたします。

平成１７年１０月３０日
登研会
代表　山田愿蔵

納谷学長宛「旧陸軍登戸研究所建物等保存について（お願い）」

2005（平成 17）年 10 月 30 日｜登研会会長　山田愿蔵｜個人寄贈



旧 陸軍登戸研究所 資料館 完成にあたって

旧陸軍登戸研究所第三科
旧陸軍技手　　大島 康弘（88才）
（明和グラビア株式会社 代表取締役会長）

戦争が終わって、早や65年、旧陸軍登戸研究所の資料が集められ、ここに公開されるにいたりましたことは、皆さまの努力の賜で心から深くお礼を申し上げます。陸軍の中で最も秘密にしていたことが、この生田校舎の中で行われておりました。大部分の人は、亡くなられましたが、約250名が在籍していた第三科で全てを知っている人はほとんど居りません。
あと10年たったら生存者は、一人もいなくなると思います。何人かの証人がいるこの時代に公開されることは、歴史上も意味があると思っております。

私は、1939年（昭和14年）9月に水道橋駅前にある現在の都立工芸高校を繰り上げ卒業して、建設中の研究所に入りました。機械科を出た私は便利な者だったのか各種印刷機の組み立て、製紙関係の機械の改造、番号印刷関連装置、古紙変造装置等々各種の機械部品の設計から改造等を担当させていただき、戦後、独立して今の会社を設立してからも非常に役に立っております。

敵側の紙幣を偽造し、経済謀略をやるという作戦は、100年近く前にドイツを中心として第一次大戦時は激しく行われました。日本はこれをまねて、山本憲蔵大佐が参謀本部に提案採用されたもので、現在の国立印刷局も全面的に応援されたものです。従って、印刷局を退職した人も多数、登戸で働いておりました。偽券と言っても印刷局で本物を作っていた人達が国家をバックにして作るものですから、本物と同じです。また、香港占領後は、原版を持ってきてコピーしていましたので、真偽の判別は出来ず、新しい物はダメ！古いお札にせよということで、出来たての新札を折り目をつけたり、汚したりして古いお札にする。という時代もありました。

戦後、山本大佐は、偽札作戦の内容を全部米軍に報告し、戦犯者は、一人も出ずに済みました。過日、某大学の先生の話では中国側でも日本軍占領地区の紙幣の偽券を大量に作っていたという話もお聞きした。東京裁判では双方がやっていたので、戦犯問題は発生しませんでした。戦時中は、印刷局幹部の方々も各国の紙幣を見せられ、いかにして同じ物を作るかという経験から技術の向上なされ、現在の日本の紙幣は非常に高度なものになっている。 今、明らかに思うことは、私達が子供の頃から出版されていた空想科学小説に出ていたような兵器を登戸で試作していたことである。風船爆弾は一科、毒ガス・細菌等は二科でやっておりました。戦争はいやですね！こんな兵器はもう要らない。明るい社会にしましょうよ！

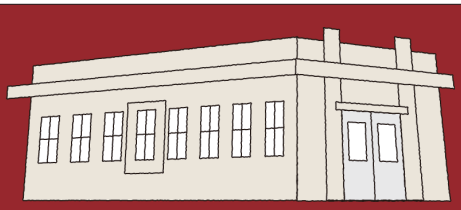
ここまで、資料を集めてくださった先生と関係者の労に感謝いたします。ご苦労様でした。

（2010年3月20日記）

「旧陸軍登戸研究所資料館完成にあたって」

2010（平成 22）年 3 月 20 日｜大島康弘｜明治大学所蔵

元第三科南方班技手・大島康弘が資料館開館にあたり送った祝辞。



おわりに

残念ながら登研会会長の山田愿蔵さんは当館開館前にご逝去され，開館を見届けていただくことは叶いませんでした。しかし，多くの登研会メンバーの皆様に支えられ，当館は無事に開館することができました。

また，30 年前，登戸研究所の疎開先である長野県駒ケ根市において掘り起こし運動を率いた高校生，北原いづみさんが 2019 年，若くしてご逝去されました。北原さんが元所員と人間関係を結んだことによって，「大人の誰にも話したくないが，君たち高校生には話そう」と人体実験や毒物兵器の製造といった重い事実を元所員は語ってくれるようになりました。近年では駒ヶ根市でも登戸研究所の掘り起こし運動が再開され，市民や高校生が「登戸研究所調査研究会」を 2018 年に発足し，北原さんも世話人として活躍されていた中でのことでした。心よりご冥福をお祈りいたします。

多くの市民，そして元登戸研究所勤務員の「二度と登戸研究所で行われたことを繰り返してはいけない」という強い思いを受け取り，当館では登戸研究所の調査研究を進めていくとともに，その成果を社会の平和教育・歴史教育・科学教育に活用していただけるよう，これからも邁進してまいります。

主　催

明治大学平和教育登戸研究所資料館

後　援

川崎市

川崎市教育委員会